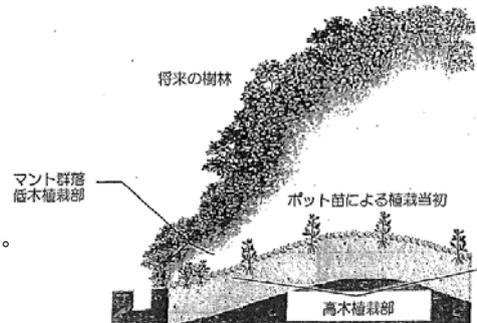


本物の森づくり ～「宮脇方式」について～

1. 混植・密植

その土地の自然環境に適した樹木(「潜在自然植生」)を中心に、
 多くの種類の苗木(ポット苗)を混ぜて高密度で植えることで、
 苗木が競い合っって早く育ち(1年後:1m→10年後:10m)、
 茂った枝葉が雑草の育成を防ぐ。多種の木でできた森は病害虫に強い。



2. 植物は根で勝負

苗木は、栄養価の高い(チッ素・リン酸・カリウムを十分に含んだ)地中深く根付くことで、
 台風・地震・火災などの災害にも強い森へと成長する。



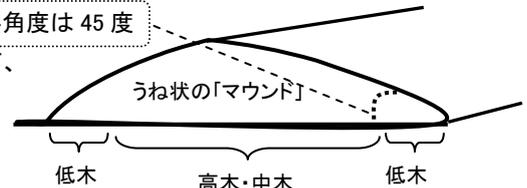
ア. “ほっこり”した「土づくり」

土を1メートル以上の深さまで攪拌し、雑草、木の実・枝・根などの有機物や、サッカーボールくらいの大きさまでの
 石・コンクリートを混ぜ込むことで、栄養価を高くすると共に、空気をたっぷり含ませて柔らかくする。
 それにより、根が息をしやすくなると同時に、地表に広がらず下へと伸びる。

イ. 「マウンドづくり」

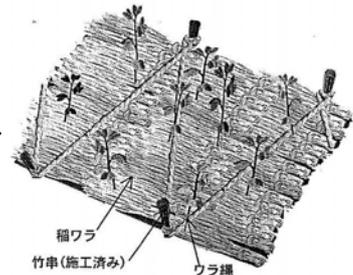
苗木を植える土は、うね状のマウンドにすることで水はけをよくして、
 根が窒息しないようにする。

マウンドの理想的な傾斜角度は45度



ウ. 稲ワラによる土のカバー(マルチング)

稲ワラをマウンド表面の土が見えなくなるまで十分に敷き詰める。
 さらに、マウンド際・頂点に打ち込んだ竹杭にワラ縄を縛り付けて、
 敷いたワラが風で飛ばされないように固定する。稲ワラが日光を遮断することで、
 土の表面の乾燥を防ぎ急激な温度変化を防ぐと共に、雑草の育成を妨げる。
 また、数年たって腐ったワラ(敷きワラ・ワラ縄)・竹杭は土の栄養価を高める。



3. 防災環境保全効果

本物の森は、大気中のCO²を吸収することによる温暖化対策だけでなく、台風による土砂崩れ、
 地震による地割れや、木々の水分によって火災の延焼などの災害から人命を守る。
 さらに防音や防塵、防風、大気や水質の浄化まで、多くの防災環境保全効果も期待される。



4. 緑の壁

工場に本物の森をつくることは、工場の壁が緑に変わることによって地域の人々に心地よさを与え、
 工場で働く従業員の心を和ませる、やすらぎ効果も持つ。

